

「まちと、出産施設と、母と子」

横浜国立大学 都市イノベーション学府

修士2年 山波向日葵

○はじめに

私はまだ母がどのようにして私を育ててくれたのか詳しく知りません。母がどのような想いを持って育ててくれたのか、本当の意味で理解していないと思います。

よく人は自分が親になって初めて親の思いを知ると言います。私は上京して初めて、母がいつもご飯を作ってくれることの有難さや、部屋がいつも綺麗でいることの難しさを知りました。でもまだ結婚や出産はしていないので、子育ての大変さや楽しさは知り得ていません。

私の母はよく言っていました。「昔は周りに知り合いがいなくてね、あなたは誰にもなつかないから大変な時期もあったんだよ。」と。それでも私は幼いころ、寂しい思いをしたことはありませんでした。

○母と母の暮らしたまち

母は結婚と同時に地元を離れ今の私の地元、福岡へと引っ越しました。父も就職を機に母と同じ地から引っ越してきたので、お互いに福岡のことは何も分からず、親戚や友達は周りに全くいなかったそうです。徐々に仕事仲間は出来ましたが、地域の人と関わる機会は少なかったと聞きました。

母は私を出産するとき、仕事を辞めて里帰りし、出産後は1か月ほど祖母がいる母の地元で子育てしました。母は長女として生まれる私を、親戚が全くおらず、何も知らない土地で生み育てるのは不安があったそうです。

今でも里帰り出産をする人は多くいます。里帰り出産をした人の多くが、自分の住む地域のことをよく知らないまま、支えなしの子育てに突入する、これは地域が抱える子育て課題のひとつです。

1か月後、母が福岡に帰ってきたタイミングで現在の家を購入しました。それは父と母が今まで住んでいた地域から少し離れたエリア。また何も知らない地でのスタートでした。

子はどんどん成長して子育ての仕方や悩みは変わるのにも関わらず、里帰り中に祖母に教わった知識だけで子育てしなければいけない環境に不安を抱いたと思います。

それから少しして、私は母と共に家の近くのスイミングスクールに通い始め、同じ年の赤ちゃんと母親同士 4 組で仲良くなったそうです。また、同じマンションに住む数家族とも親しくなりました。幼いころは家族ぐるみで旅行やクリスマス会、忘年会、新年会をしたりしました。母が仕事で帰りが遅いとき私はその友人宅に行き、自分の家かのように居座っていました。また友人も同じく私の家が実家かのように遊びに来ていました。

私が育った地域では「地域みなで子どもを育てる」という意識があったのだと思います。このような地域であったからこそ、私は親戚が全くいなかった地で、のびのびと寂しい思いをせず育つことが出来ました。

○まちと私たち

いま私は、「自分の住むまちを知ること＝自分の日々の生活を豊かにすること」だと思っています。この考えはその人自身の環境によって変わるかもしれません。

私はいま大学院生で、地元を離れて暮らしていて、結婚していない、子どももいない、自由に自分のお金を使うことが出来る、そんな環境にいます。このような環境の人はきっと私のように、自分の住んでいるまちを知ることによって少しいつもと違う経験が出来るのではないのでしょうか。わたしは家の近くで美味しいコーヒー屋さんをみつけたら“第2の落ち着いた空間”に認定するでしょう。家から最寄り駅までにスポーツジムを見つけて通い出したら“自分を高められる場所”と思うでしょう。いままで知らなかったことを知り、それが自分の生活の一部になったら、私の QOL は急上昇します。

これがお父さんだったら。これがおばあちゃんだったら。その人の立場によりまちを知ることによる効果は違うと思いますが、どんな人でも自分の住むまちを知ることが重要だと思います。

これが妊産婦さんだったら「自分の住むまちを知ること＝子どもが成長できる場所か見定めること、助けが必要な時にどこに頼ればいいのか知ること」かもしれません。自分だけに対する目線ではなく子のことを考えた目線になると、今まで見向きもしなかったところが大切になることもあるでしょう。お母さんが、まちを知り、まちの人と出会い、まちの制度を知ることが、子どもの生活も変わります。

○子育ては楽しい？疲れる？

ニュースを見れば流れてくる「児童虐待最多」の文字。産後にお母さんが抱える問題は様々です。そもそも出産で頑張った身体はボロボロ、母乳はちゃんとでるかな？という不安、なんで泣いているか分からない赤ちゃん、睡眠時間は削られ、ますます疲労は溜まっていきます。赤ちゃんは可愛い、だけどそれだけではどうにもならないことも事実です。

自分の家は本来、落ち着く場所、疲れを癒す場所、ワクワクする場所であると私は思います。しかし不安と疲労でヘトヘトになったお母さんにとって、家は地獄のような場所であるのかもしれません。子どもの泣き声がうるさくて耐えられなくなり、耳栓をしてトイレに籠ったことがあるというお母さんの話を聞いたことがあります。リビングや寝室どこにもいたくない、しかし子どもを置いて外には行けないという葛藤があり、トイレに耳栓をして籠ったのだと思います。このような状態ではトイレすらもお母さんの居場所ではありません。家のどこにも居場所がなくなった時、心にも余裕がなくなるのだと思います。

お母さん達の居場所が家や心の中になくなる状態にさせてはいけません。家の中に居場所がある限り、児童虐待は起きないのかもしれませんが。

○私が通学するまち、神奈川県横浜市の支援体制

横浜市では、支援が必要な人に産後ケアの補助をしています。お母さん一人ひとりと面接を行い、本当に支援を必要としている人は誰なのかを見分けます。

産後ケアのひとつであるデイスティは、助産所と連携して行っています。助産師さんによるおっぱいケアや沐浴指導、お母さんの悩みを聞き一緒に解決法を考える、などの活動を行っています。

産後ケアはお母さん達の心と身体、両方にとって大切なことです。しかし問題と考えられるのは、現在の横浜市の制度が産後ケアを必要と判断された人にしか提供されないことです。ほとんどのお母さんにとって、この産後ケアは必要なものであるのにも関わらず、産後ケアの補助を受けるためには厳しい基準が設けられています。そのため、産後ケアを受けたいと思っても受けられないお母さん達が多くいます。

ある助産師さんは言っていました。もっと早期からお母さん達に産後ケアを進めてほしい。お母さん達がヘトヘトに疲れ果てる前に産後ケアを紹介したい。子のことを考えた制度や組織は山のようにあるけど、産前産後のお母さん達のために作られた制度や組織、考えは

まだまだ少なく、存在していても浸透していないんですと。

0歳児保育も考えが浸透していないものの一つです。0歳児は家庭で保育することが望ましい、育休中だから必要ない、可哀想などの意見があります。少し前までは神奈川県でも0歳児保育はあまり行われていませんでした。しかし0歳児保育の大切さ、お母さんを休ませることの重要性、病気やケガなどにより育児ができない人がいるといったことが考えられ、横浜市では0歳児保育の支援が開始されました。

しかし行政が支援を行うと決めても、0歳児保育を行うところの周辺地域では住民から不安や反対の声が上がることは珍しくありません。行政の支援に頼るばかりでなく、地域が一体となって子育てに対する理解を深めていくこと、「地域皆で子を育てる」という考えも大切です。0歳児保育の考えが浸透した時、地域とお母さん、行政、出産施設、保育施設などが一体になれたと言えるのだと思います。

○出産施設とまちと母と子

これから自分の子どもがこのまちで、どのように育っていくのか、誰でも気になることだと思います。今までそのまちに住んでいなかった人は、子どもをどこで遊ばせればいいのか、どこに子育て支援を受けれる場所があるのか、どこに頼ることのできる人がいるのか、分からないことが多いでしょう。今までこのまちに住んでいた人も、自分の生活を場所は分かるけれど、子どもの用事はどこで済ませればいいのか分からないのではないのでしょうか。そんな時、誰かがひとこと「おすすめのお店はここだよ」「ここに相談すればいいよ」「私はふうに育てたよ」と教えてくれたらいいですね。

お母さん達には、妊娠が発覚してから出産するまで必ず通う場所があります。それは出産施設である病院、診療所、助産所です。これらの施設では分娩が行われているのはもちろんですが、その他にも様々な活動が行われています。支援プログラムを開催したり、お母さん同士が交流する空間や癒しの空間を設けたり、周辺地域と一緒に出産に対する理解を深めたり、活動は多方面にわたります。

たとえば支援プログラムのひとつである料理クラス。お母さん達同士がコミュニケーションをとれるようにと企画されています。このプログラムでは特に何を教わるわけでもありません。ただ、お母さん達が会話できるようにセットされた時間なのです。ここでお母さんたちが知り合って、情報交換できるようになって、互いにアドバイスしたり支え合えるような関係性になれるかもしれないと想って。

また支援プログラムのひとつ抱っこおんぶクラスでは、抱っこの仕方、おんぶの仕方を皆と共に学びます。同時に先生とお母さん達がコミュニケーションを取ることで、お母さんの不安解消に努めます。

行政と協力し行っている産後ケアでは、お母さんひとりひとりの状態を見ながら、その人にあった支援を行っています。

出産施設に設けられている談話室も支援活動の一部です。個室が多い施設では、自分の部屋では出産による疲れを取れるようにしており、談話室のような空間ではお母さん達が相談や雑談ができるようにされています。

図書室やキッチン、食堂なども、お母さん達がリラックスできるようにと設けられていることがあります。

中には産前産後支援活動を地域の新聞に取り上げてもらい、その新聞を通して子育てに対する理解を周辺地域に広めようとしている助産院もあります。その助産院では、助産師さんが子育て支援に使用する場所を助産所の近くで探していたところ、新聞を見て子育て支援に対する興味をもってくれた地主さんが、子育て支援用の家を建て賃貸してくれたという話も伺いました。

出産施設は必ずお母さんが通う場所であるからこそ、お母さんの気持ちや身体状況、子どもものことにとっても理解のある場所だと思います。このような施設がお母さんの拠り所になったり、お母さんと地域を繋げるきっかけ作りをしたりすることは、とても大切な取り組みだと思います。

○おわりに

2020年はコロナウイルスによる外出制限や活動自粛の影響で、出産に立ち会えなくなり、面会が出来なくなり、多くの支援教室プログラムが中止され、お母さん達同士のコミュニケーションの場、地域の人とのコミュニケーションの場、先生とお母さんのコミュニケーションの場が失われました。また自分の住むまちを知る機会や子どもを外で遊ばせる機会も少なくなりました。そんな辛い時代でも生まれる子は沢山います。この時代でお母さんにできることは何か、子にできることは何か模索した結果、沢山のアイデアが生まれました。オンラインでの支援プログラム開催、リモートで行う相談会。

オンラインでの活動が増える一方で、まちに出たり、地域の人と話したりすることが減り、家にいる時間が増えました。まちに出る機会が少なかったからこそ、心地の良い家を保つことが大切であり、難しいことであったと思います。

いつかまた直接会って会話し、相談できる世の中になった時、お母さん達が安心して不安の少ない子育てができることを願います。

そのために今できることは、お母さん達がどのようなことに悩んでいるのか、その悩みや不安を地域として支えるにはどうしたらいいのか、どんなまちにお母さんは住みたいのか、どんなサポートをすれば心地の良い家のままでいられるのか、考えることだと思います。

子を皆で育てるまち、お母さんが心地の良い家は、全ての人に優しい場所になる

まちや出産施設、母を主体として全ての人に優しい場所ができることを願っています。